

コーラルの嵐

デルフィニア戦記 7

茅田砂胡

中央公論新社



目次の操作方法について

・表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わります。ここでクリックすると、該当の頁までジャンプさせることができます。

地	タイトルロゴ・マークデザイン	カバーデザイン	挿	口	カバーイラスト
図	水野デザインルーム	しいばみつお (伸童舎)	画	絵	沖 麻実也
	斎藤由加				

目次

1	—————	9
2	—————	22
3	—————	38
4	—————	56
5	—————	73
6	—————	90
7	—————	101
8	—————	118
9	—————	143
10	—————	160
11	—————	181
12	—————	190
13	—————	206
あとがき	—————	228



シャーミアン●ドラの嫡子。女騎士。

ブルクス●宰相。先王時代には優秀な外交官として仕えていた。内乱時には侍従長をこなし、デルフィニアの裏も表も知りつくしている。

カリン●女官長。ウォル生誕当時、生母ポーラに味方しウォルを暗殺の危機から救った。

ガレンス●ラモナ副騎士団長。

ジョシュア●ラモナ騎士団の新米騎士。

ドゥルーワ●先代デルフィニア国王。10年前に逝去。

アエラ●ドゥルーワの妹。ドゥルーワ在位中、大貴族であり右腕でもあったサヴォア公爵に嫁ぐ。バルロの母。

エンドーヴァー（ラティーナ・ベス）●子爵夫人。ウォルの昔の知り合い。

ゾラタス●タンガ国王。

ナジェック●タンガ皇太子。

オーロン●パラスト国王。

グライア●ロアで黒主と呼ばれていた野性の悍馬。リイの騎乗を許す。

CAST

CAST

ウォル（ウォル・グリーク・ロウ・デルフィン）●デルフィニア国王。庶子であったため、一度はその地位を奪われるも多くの味方を得て再び王冠を被る。統率力に優れ、無私公正。戦士としても優秀。

リィ（グリンディエタ・ラーデン）●異世界から来た少女。華奢で可憐な外見とは裏腹に無双の剣の腕と戦士の魂を持つ。ウォルの王権奪回に類を見ない活躍を示し、戦女神と讃えられる。内乱平定後、ウォルの養子となり、現在はデルフィニア王女。

バルロ●国内の名門サヴォア一族の当主で、公爵。ティレドン騎士団長。ウォルの従弟で毒舌家。ウォルのことを早くから国王として支持し、内乱時には敵方によって国王に祭りあげられるが固辞し続けた気骨の持ち主。

イヴン●独立騎兵隊長、兼親衛隊長。ウォルの幼なじみ。タウの自由民。

ナシアス●ラモナ騎士団長。バルロの友人。

シェラ●リィ付きの女官。実はリィを暗殺しにきたファロット一族の少年だった
が……。

ドラ●将軍。名馬の産地として名高いロアに領地を持つ伯爵。ウォルの養父フェルナン伯爵の親友だった。

大華三国図

タンガ

ハラスト

アサメオン

テルフイニア

モサイ

ベシタス

・ヒルダナ
キルツ山脈
・ホートナム

・コローラル
・サツサス
・シラ

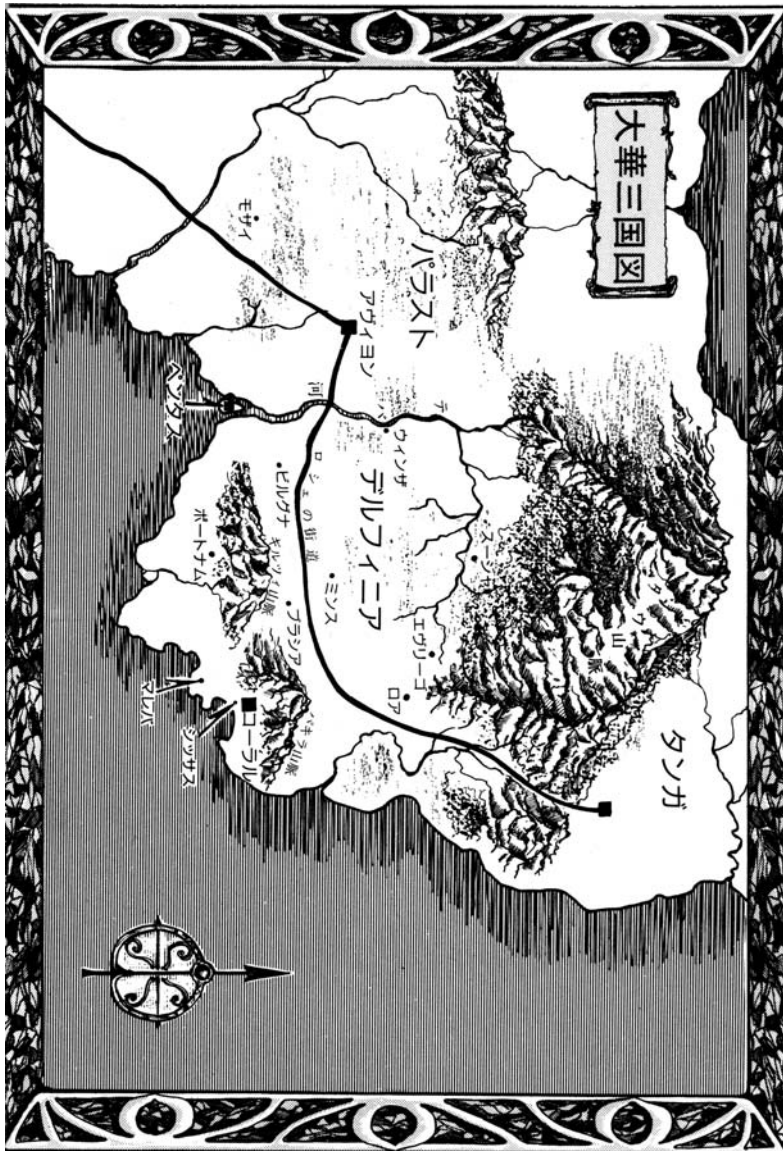
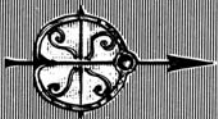
河

ロメの街道

・ミンヌ

ウインサ

・エシリョ
・ロク



コーラルの嵐

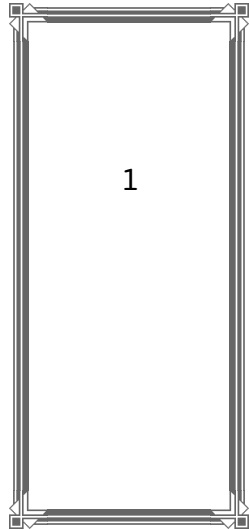
デルフィニア戦記 7

Definarian Wars
A RECORD OF THE

王宮は上を下への大騒ぎになった。

コーラル城の一の郭かくには主に来客用にいくつもの離宮が点在しているが、国王は女官長を呼びつけて、そのうちの一つをエンドーヴァー子爵夫人の住居として整え、身の回りの世話をする女をつけるように命じたのである。

心中仰天していたはずだが、顔にも声にも微塵みじんも出さず、淡々と復唱して下がったのは、まさに女官長ならではの名人技だった。下っ端官僚ではこうは



いかない。

事実、城内の貴婦人達は突然降ってわいた愛妾あいしやうの噂に夢中になった。しかしそれはどちらかというのと、批判の色が強かった。

「パラストのエンドーヴァー子爵夫人ですって。聞いたことのないお名前ですけれど……」

「お年も召していらっしやるようですし……陛下は年増好みでいらしたんですね」

と、宮廷婦人たちの会話も物珍しさと皮肉の域を出なかつたのだが、わずか数日でそれは急変した。

国王は連日この夫人の許もとを訪れ、樂しげに語らい、夜には酒席の相手をさせたのである。王女を除けばかつてなかつたことだ。

貧乏貴族だろが年増だろが、国王の寵愛ちようあいを受けているという厳然たる事実の前では無に等しい。

貴族たちの反応はがらりと変わった。もう品定めどころではない。何とかして取り入ろうとする動きが活発になり、エンドーヴァー子爵夫人はわずか数

日のうちに宮廷婦人たちに受け入れられ、コーラル城に落ちついてしまったのである。

しかし、城内の人間すべてがこの愛妾騒動に狂奔したわけではない。宮内の最高責任者である女官長カリン、軍事外交はもちろん、城内の『民事』にまで細かく眼を通す宰相ブルクスはともに静観の態度を取った。

また、王国の重鎮である英雄たちは一様に率直な驚きを見せたのである。

「大変な騒ぎですな」

ドラ將軍が呆れたように言えば、

「いやはや、まさか陛下が女性に関して、これほど電光石火でいらつしやるとは思わなかった」

ヘンドリック伯爵はしみじみと首を振って、至極もつともな感想を洩らしたものだ。

その横では近衛司令官のアヌア侯爵が、端正な顔立ちをいくぶん曇らせている。

「しかし、この騒ぎは少しばかり行き過ぎではあり

ませんかな」

「さよう」

「いかさま」

さすがに二人ともわかつている。

時を同じくして北の塔から出てきたバルロとナシアスもこの事態には驚愕したものだ。

「いったい俺たちが牢に在る間に何が起こった？」

二人にとってはまさに青天の霹靂である。

この間まで無人だった離宮に見知らぬ女性が入ったばかりではなく、進物を持って『拝謁』しようという人が引きも切らない有り様ときている。

他の国なら後宮への付け届けも国王の気に入りの寵姫へ取り入ろうとする動きも日常茶飯事と言つていい。しかしまさか、

「この城内でこうした光景を見ることができるとは思わなかった」

バルロが思わず洩らしたように今のデルフィニア王宮では異様な光景である。

ナシアスが首を傾げて、

「陛下が愛妾をお持ちになつたのは結構な話だが、それほどのご寵愛となると、どのような女性か気になるな」

と、似合わないことを大真面目に言い出したので、バルロがからかい調子に言ったものだ。

「ほほう。お前でも人並みに女性の話題には興味があるのか？」

「どういう意味だ？」

剣技にかけてはバルロと肩を並べるラモナ騎士団長も、女性関係となるとティレドン騎士団長の華々しさには及びもつかない。

「ビルグナはいいところだが、なにぶんあまりにも田舎でうるおいがないからな。よさそうなところをみつろろつてやるから牢暮らしの垢あかを落としていつたらどうだ？」

ナシアスは笑つて肩をすくめた。

「遠慮しておく。垢を落とすのは結構だが、代わり

に紅白粉の匂いを移されたのでは配下のものたちに示しがつかん」

こちらも呆れ返つて肩をすくめたバルロである。

「お前と言ひ、従兄上あにょうえと言ひ、なんでそこまで女を毛嫌けがいするの俺にはかいかもく見当がつかん」

「誰も嫌つてなどいないさ。お前は思う存分羽を伸ばしてくればいい。そんなことより問題は……」

「城内に事実上の『王妃』が誕生してしまったこの事実だ。ふむ。あまり語呂しやれがよくないな」

洒落しやれや冗談を飛ばしていた口調のままですらりと言つてのける。

ナシアスはそつとため息をついて額を押さえた。

「時々お前の頭の中がどうなっているのか、覗いてみたくなるぞ、私は」

「覗かせてやろうか？ 僧侶のような暮らしのラモナ騎士団長にはいささか刺激の強い眺めだぞ」

「もういい。お前と話していると頭がおかしくなってくる。それよりもその愛妾だ」

城内の女性に関するのならカリンの管轄だ。

両騎士団長が女官長に詳しい事情を聞こうとしたところ、ドラ將軍たちとぶつかった。考えることは同じようで、年長の英雄たちも今の状況を憂慮しているらしい。

一方、女官長も普段なら貝より口の堅い人である。誰に囲まれようと、どんなに問いつめられようと奥の事情を洩らしたりはしないのだが、今回ばかりは様子が違った。

宰相とも相談した上で、將軍たちと両騎士団長に、国王と夫人とのやりとりを語ったのである。

野次馬根性などではない。この人たちには知っておいてもらうべきだと二人は判断したのだ。

はたして五人とも再度、眼を見張った。
「女のほうから愛妾の地位をねだることはないではないが……、何とその日のうちにか」

年長の英雄たちが呆れ果てれば、ナシアスは、
「それでは愛妾にいたしましょう……ですか？」

呆然と眩き、バルロは頭を振って、

「それこそあの人の頭の中はいったいどうなっているのか、時々さっぱりわからなくなる」

大いに嘆いたものだ。

五人はただ驚いているようだが、カリンはむしろ、この事態に眉をひそめていたのである。

「もちろん、陛下が女性に興味を示してくださいださったのはいい傾向です。この際、外国人だろうと未亡人だろうとかまいませんが、でも……」

釈然としない様子で言葉を切って沈黙する。

宰相ブルクスが横から助け船を出した。

「わかりますよ、女官長。その気持ちはよくわかります。以前の夫人と陛下の間に何があったのかは存じませんが、愛妾にしてください、はいわかりましたというの、ちと問題です」

カリンはさらにため息をついて、

「一の郭に住まわせるというの、どうかと思います。二の郭なり、郊外の別荘なり、側室を置くならば他

にいくらでも場所はあるでしょうに、あれでは陛下がよほどに夫人を寵愛していると世の人は受け取るでしょう。いえ、もう受け取られています。それが何やら……」

「さよう。困ったことにならねばよいのですが」

その懸念はやがて現実となった。

夫人が一の郭の離れに入ってから十日目、国王はカリンを呼んでこう言いつけたのである。

「実はな、エンドーヴァー夫人が今の住居は何かと不自由だと訴えている。本宮に住ませたいのだが、そのようにはからつてくれないか」

面おもてにこそ出さなかったが、カリンはひやりとした。

来るべき時が来たとは思ったが、まさかこれほど早いとは思わなかったのである。

「夫人がそのようにお望みなのですか？」

「ああ。空いている部屋はいくらでもあるだろう」それはある。山ほどある。しかし、そういう問題

ではないのだ。

表情は動かさずにめまぐるしく思考を走らせると、古強者ふるつものの女官長はいつもと同じように、やんわりと言った。

「もちろんお部屋のご用意くらいはわけもないことですが、そのように取り計らいます前に、姫さまにお話しになってはいかがでしょうか」

王が愛妾を持つのに王女に断つたりはばかったりする必要はどこにもない。普通ならだ。

国王も意外そうな顔になったが、それでも、あの王女がどんな反応を示すかは気になるらしい。首を傾げた。

「怒るかな？」

「お怒りにはならないと思いますが、戻っていらした時に見知らぬ女性が離れに住んでいたら、お驚きなさいませうでしょう」

「ふむ……、そうだな。では夫人にはもうしばらく待つてもらおうか」

と、国王は実に呑気な口調なのである。

カリンは丁重に色代しよたいして引き下がると、その足でブルクスに会いに行つた。話を聞いて驚いたのはブルクスも一緒である。

「いや、女官長。それはいけません。そんなことをしたら……」

「わかつております」

国王に王妃があれば問題ない。他に愛妾があるならまだいい。百歩譲つて王太后が生きていて奥向きを仕切つていてくれれば、こんな不安は覚えなない。

しかし、独身の国王が唯一寵愛する女性が王宮の中心である本宮に住まうとなれば、バルロがいみじくも洩らしたように『王妃』として扱わねばならなくなる。

国王を自在に動かせる者には絶大な権力が与えられる。それが常識である。グリンダ女王もその一人だが、王女は権勢などにまったく興味を持たず、こびへつらおうとする者をこちらからはねつけていた。

「だからといって陛下に、それは夫人に権力を持たせることになりまますから危険です、とはまさか申し上げられませんし……」

「夫人は今のところその地位を利用する気配はない。なかなか懸命で人づきあいも上手にこなしている。ですからおのこと申し上げにくいのでしょうか」

「おっしゃるとおりです。陛下も夫人のもとへ足繁く通つてはいらつしゃいますが、ご政道をおろそかにするようなことはなく、夫人も口を出すようなことはなさいません」

「少なくとも今は、でございますな？」

「おっしゃるとおりです」

苦労人の二人だ。まして二人とも国王の私生活が往々にして国政に深く関わってくることを知り尽くしている。

現にあの夫人の元へせつせと通う貴族や豪族がすでに何人もいる。そうした連中はもちろん手ぶらで行くようなことはない。目の眩くらむような金銀財宝を

贈り物として与えている。

今はまだいい。夫人は贈り物を受けはするが、それだけだ。しかし、夫人が本宮へ入るようなことになれば、その機嫌を取り結ぼうとする連中の動きは必ず激化する。山のような賄賂わらわと引き替えにどんな要求をするかわかったものではない。

奥を預かるカリンにとっても宰相であるブルクスにとっても『好ましくない』事態である。

「女官長。せめて夫人が本宮に入ることだけでも止めさせるわけにはいきませんか」

「それを陛下に進言するためには理由が必要です。ですが、今の私に言えるのは子爵夫人のなさりようが少しばかり唐突であり、それがその、あまり感心できないというだけです。これでは単なる誹謗ひぼうにすぎません」

二人はそろってため息をつき、ブルクスが言った。

「ここはやはり、姫さまのお帰りを待ちましょう」
「はい」

若干十六歳、王家の血を引いてもいない王女だが、とにかくここ一番で頼りになる人なのである。

コーラル城の人々の焦燥しょうそうと祈りが天に通じたのか、それから三日目の昼、王女は王宮に戻ってきた。いつもならパキラから直接西離宮へ戻る王女だが、今回はシエラを連れていたので大手門を通ったのだ。門番はお帰りなさいませの挨拶もそこそこに慌ただしく角笛を吹き鳴らし、これを受けて廓門くわくわ、正門でも高らかに角笛が鳴り響いた。

グライアにまたがった王女がその仰々しさに驚きながらおっかなびつくり正門を潜った時には、女官長が飛びつくようにして出迎えたというわけである。事の次第を聞いて王女も眼を丸くした。

「愛妾？ あの朴念仁ぼくねんじんがか？」

「はい。あの陛下がでございます」

と、女官長もつられて意外の念を吐露とろしたものだ。最初は驚いていた王女だが、女官長が詳しい事情を語り進むに連れて、今度は首を傾げたのである。

「でも、別に、その女の人が気にいらないうってわけじゃないんだろ？」

「ええ。夫人の人柄をどうというのではないのです
が……」

「が、なに？」

「あまりにも急なお話だったことが一つ。それに、王妃はもちろん王太后もおわさぬ今のコーラル城内において、一人の女性が陛下のご寵愛を一身に受けることはあまり好ましくありません」

王女はぼりぼり頭を掻きながら言ったものだ。

「で、おれにどうしろって？」

「夫人を本宮に置くことには反対だと、せめて思いとどまるようにと、陛下に進言していただけませんかでしょうか？」

またまた王女は眼を丸くした。

「おれが言うのか、そんなこと？」

「ぜひ、お願いいたします」

「どうして？ カリンが言えればいいじゃないか。お

れが言ったって説得力ないよ」

「それは私も同じことでございます」

「はあ!」

ためらいがちに眼を伏せて話していた女官長だが、ここで顔を上げてきっぱりと言った。

「これといった理由はないのです。陛下から何故と問われましたら、納得していただけるだけの答えは返せません。ですが、それだけは思いとどまっていたきたいと思います」

王女はしばらく考えた。

具体的にどこがいけないのか、カリンの懸念が何なのか、王女にはよくわからない。しかし、女官長の人柄もその判断も信頼できるものである。その人がこうまできっぱり言いきるのだ。無視できないものがある。

国王は今日も大勢の侍従に囲まれて机に張り付いていた。見るからに忙しそうだったが、王女の顔を見て笑顔になった。

「おお、戻ったか。旅はどうだった？」

「おれの旅どころじゃないぞ。ちよつと離れた間になんなんだ、この騒ぎは？」

国王は書類を片手にしたまま、くすぐったそうに笑つたものだ。

「騒ぐほどのことでもないと思うがな。しかしまあ、知つてゐるなら話は早い」

国王はずらりと控えていた侍従たちを室外へ追い出して、王女と二人になつた。

これはいつものことである。そうして国王は単刀直入に切り出した。

「実はな、夫人をこの本宮に迎えたいのだが、かまわないだろうか」

肩をすくめた王女である。

書類が広げられたままの机に大胆にも腰を下ろし、椅子に座つてゐる国王をまじまじと眺めたものだ。

「あのな」

「うむ」

「その人、ほんの半月前に訪ねてきたんだろ？」

「ああ、お前とほとんど入れ違いだった」

「昔からつきあひがあつたのか？」

「まあな」

「スーシャにいたころか？」

「まあ、そうだ」

国王がちよつと眼をそらしたのを王女は見逃さなかつた。

「その人の死んだご主人はパラストの貴族だったんだろ？ 夫婦でスーシャに滞在してたのか」

「いや。夫人が子爵と結婚したのはスーシャを離れた後のことだ」

「じゃあ、その時は今とは名前が違つたんだな？」

「まあな。いいではないか。今ではエンドーヴァー

夫人なのだから」

王女は机から降り、さりげなく話を戻した。

「おれはお前がその人をどこに住まわせようと問題ないと思うんだけどな。もうちよつと待つたほうが

「いいみたいだぞ」

「そうなのか？」

「ああ。そういうことはあんまり急にしないほうがいいんだってさ」

「そうなのか。誰が言った？」

王女は笑って手を伸ばすと、国王の黒い髪を荒っぽく撫でた。

「誰でもいいけど、その心配はもつともだな。この王様は底抜けに人がいいからな」

「おい、リイ。かきまわさんでくれ」

国王は笑いながら小さな手の攻撃から逃げた。

「人が何と言っているかは知らないが、心配されるようなことは何もないぞ。愛妾にしてくれと頼まれたからそうしただけだ。お前も一度、夫人に会ってみてくれ。きつと仲良くできるはずだ」

「ああ、そのうちな」

執務室を出ると、カリンだけでなくバル口までが王女を待ち受けていた。

「団長。釈放されたのか」

「ええ。出たとたんにこの騒ぎでしてね」

バル口は苦い顔である。

「それで？ 従兄上に思いとどまるように進言していただけましたか」

「そこまでは無理だよ。一応もう少し待つようには言っただけど、どうかなあ？」

首を傾げている王女の前で女官長とティレドン騎士団長は眼と眼を見交わし、団長が咳払いして王女を一室に誘った。

数人が集まってお茶を楽しむのにちよよいよいやうな、趣向を凝らした小さな部屋である。

茶を運んできた侍女が下がり、王女と二人きりになると、バル口はおもむろに切り出した。

「どうもあなたは事態の重要性を理解していないようですからな。ご説明いたしましょう」

「ぜひともそうしてもらいたいな。今まで女官長も団長も、ウォルが女の人を近づけようとしないのを

嘆いてたじゃないか。望みどおりになったわけだろ？ 何がいけないんだ？」

「まったくです。何がいけないんでしょうな」

と、バルロが大真面目に言ったので、王女は眼と耳を疑ったものだ。

「団長？」

ティレドン騎士団長は実に複雑な顔である。

「外国人で未亡人というのでは非の打ち所がないとは言えませんが、文句を付けるほどのことではない。本宮に入れてくれとのおねだりも、国王の寵愛を受けた女なら誰でも望むことですからな。特に声を荒らげるようなことでもない。しかし、どうも気に入りません。従兄上はその夫人に甘すぎる」

「甘いといけないのか？」

問い返すと、バルロの皮肉の虫がまた騒いだらしい。低い笑いを洩らした。

「百戦錬磨の王女も男女のこととなるとお手上げのようですな」

「そりゃあそうだろ。おれはまだ発情期前なんだ」

バルロは、こんな場合だが盛大に吹き出した。

膝を打って高らかに笑う。

「それはご謙遜というものだ。あなただって洗って着飾ればそう捨てたものでもない。第一、十六なら結婚してもおかしくない歳だぞ」

「そういう問題じゃないんだけど……、まあいいか。とりあえずその夫人のことを考えよう」

「いかにも」

バルロも真顔に戻り、身を乗り出した。

「つまり、俺の心配は、女官長や宰相の懸念も同じだと思うが、こういうことです。その夫人の身内だという者がパラストから現れ、この宮殿でしかるべき地位をねだったとしたら？ あるいは夫人に取り入った貴族たちがこれこれの役職が欲しいとねだったとしたら？ 夫人は従兄上を動かしてそのとおりにしてしまうかもしれない」

王女は呆れ返った。

「団長。北の塔暮らして頭がどうかしたんじゃないのか？ ウォルがそんなことを許す王様かどうか、団長が一番よく知っているはずじゃないか」

「わかっていまずとも。いつもの従兄上ならば側室の要求だからといって公私の混同など決してなさらない。しかしだ、そこで男女の問題になるんです」

「普段はちゃんとした王様でも、女の人に夢中になると何をしでかすかわからないってことか？」

「そのとおりです」

十六歳の王女と二十五歳の騎士団長の大真面目の会話である。

「従兄上はもはやただの男ではありえない。夫人にしたところで、以前に見知っていた若者が王冠を得たと知ったからこそ訪ねてきたのでしょう。何度も言うがそれを打算と責めるつもりはない。当たり前のことだ。問題は従兄上がそれを呑み込んでいくれるかどうかなんです」

「お前が国王でなかったら夫人は見向きもしてくれ

なかった。それをわきまえた上でつきあえて？」

「もつとも残酷な言い方をすればそうなります」

「だけど……、そんなことウォルに言えないよ」

「言えません。俺もそこまで鬼にはなれん。まして、従兄上はご公務をおろそかにしているわけでもない。考えすぎだと一笑されるか、ご機嫌を損ねるようなことにもなりかねない」

言うべき時は恐ろしく思いきったことを言う騎士

団長だが、微妙な問題だけにさすがに歯切れが悪い。

王女はしばらく考えて、言った。

「仕方ない。担当者を呼ぼう」

「担当者？」

王女は人を呼んで伝令を用意するように言い、書記官から紙とペンを借りて手紙をしたためた。

手紙と言ってもほんの数行である。

バルロが見守る前で王女は封だけは厳重にして、息せききつてやってきた伝令兵にその手紙を手渡した。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。